

- 一 名を呼べはカラス応えて椿の実
 二 海越え来る小春の着信音
 三 出迎へは船着場にて小六月
 四 冬帽子脱がずに競馬予想立て
 五 小春日や子のゐぬ部屋に時計鳴る
 六 小春日のあたらしき雲見てまはる
 七 西の市抜けて三味鳴る家に入る
 八 短日や今日は今日にて暮れてゆく
 九 猫五匹気ままに集ふ小春かな
 一〇 ぬくめ酒師の座残れる島の茶屋
 一一 冬夕焼け聞く人もなき独り言
 一二 小春日や石に連れ添ふごとき石
 一三 ねんねこの児を目覚めさせ西の市
 一四 父母の墓見下ろしをるや帰り花
 一五 冬隣りカラスに名前つけにけり
 一六 小春日や島の狸に人群れて
 一七 乳飲み児に母が指差す小春空
 一八 小春日や縄跳びしつづ走り去る
 一九 地下鉄を出れば風の三の西
 二〇 シリウスの凜光寒し湖の岸
 二一 小春日やマスクの中で唄う唄
 二二 落葉して星空近くなりしかな
 二三 友ごとに切手を選ぶ小春かな
 二四 小春日やおでかけですか上野まで
 二五 消防団詰め所明るき三の西
 二六 ベランダに並ぶ布団も小春かな
 二七 小六月探しに行こう青い鳥
 二八 鴨の来て賑やかになり町の川
 二九 霜の朝早出を常の仕事とし
 三〇 小春風画廊のあとに寄る埠頭
 三一 小春風鵲のつがひは水尾かさね
 三二 三の西雪の気配の風荒るる
 三三 スマッシュもオンザラインに小春風
 三四 発熱の背中に冷や水浴びにけり
 三五 短日や線路は山へと続きをり
 三六 小春風乗合船の列に従く
 三七 地を歩む螻蛄風に枯るるまま
 三八 拍子木に二の西の空引き締まる
 三九 しなやかな指を真冬のピアリスト
 四〇 小春風猫の背中にとどまりぬ
 四一 大縄跳び百回飛んで小春かな
 四二 小春日やガラスの歪む島のカフェ

- 四三 みどりこの小さきあくび小六月
四四 火の島は雲ひとつのせ冬霞
四五 一の酉昼にも勝る灯りかな
四六 木の葉散る人肌爛にほろ酔うて
四七 手と足をぶるぶる振れば小春風
四八 白無垢の笑顔のまへを雪ばんば
四九 冬かもめ海の名残の石垣に
五〇 鳶たゆたへる掛軸の小春空
五一 自画像の濃き鉛筆や冬深む
五二 一隅の土台真つさら冬浅し
五三 湯気立ててガラス拭きたり誕生日
五四 石路明り芭蕉句碑には至らずに
五五 石路の黄色君の額に移りけり
五六 山々を染め終へ眠る竜田姫
五七 牡蠣棚に小春の波の繰り返す
五八 アリア流る小春日てふ夢の国
五九 十三夜月に遅れて雲の波
六〇 真つ新の半纏羽織り一の酉
六一 ひとつづつ席空けてをり冬深む
六二 焼き芋屋黙つて通る屋敷街
六三 芳しきもの並べをり冬林檎
六四 神留守の島の岩屋に閻魔様
六五 小鳥来る縁にとりどり小座布団
六六 小春日や昨日のことは忘れけり
六七 たたみたる傘より出でて馬追よ
六八 シリウスを頂く樹木鎮まりて
六九 靠れくる猫の甘噛み冬ぬくし
七〇 一音の余韻オルゴールの小春
七一 焙じ茶と煎餅二枚日なたぼこ
七二 冬暖の蛸煎餅を分かちあふ
七三 裸灯に古書売る路地や神無月
七四 ジオラマの小人の影も小春かな
七五 古希過ぎぬ大き熊手を買ひ続け
七六 小春日や参道に曳く影長し
七七 まだあたたかいねと子が拾ふ落葉
七八 湖に集ひにぎはふ大白鳥
七九 龍恋の鐘は撞かずに懐手
八〇 芭蕉忌や心にひとり雨を聴く
八一 黄昏の来て小春日の終りゆく
八二 見栄で買ひし熊手は重し銀座線
八三 子どもらの声高らかに昼の月